

## 日本英語教育史学会 会報

277

2016 年 10 月 10 日

**HiSELT** Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan

日本英語教育史学会

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 江利川春雄)

事務局 〒120-8551 東京都足立区千住旭町 5 番  
東京電機大学工学部英語系列 河村和也研究室  
tel : 03-5284-5641 fax : 03-5284-5699  
e-mail : membership@hiset.jp

会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)

ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873

三菱東京 UFJ 銀行千住中央支店【普通】0997182

学会公式ウェブサイト [www.hiset.jp](http://www.hiset.jp)

## 第259回研究例会報告

2016 (平成 28) 年 9 月 17 日 (土), 県立広島大学のサテライトキャンパスひろしま (広島市中区大手町) において第 259 回研究例会が開催されました。参加者は 19 名でした。

はじめに研究発表が行われ, 藤本文昭氏 (横浜翠陵中学・高等学校) が「戦後英語教科書 (読本) に登場した国家元首について～戦争と平和をテーマとして, オバマ大統領の広島演説の前に何が検定教科書で語られていたか」というテーマでお話しされました。続いて拝田清氏 (四天王寺大学) を指定討論者に迎え, 「自著を語る」として山田昌宏氏 (日本英語教育史学会会員) による「戦後における岡山県の中学・高校の英語教育はいかになされたか: 山田昌宏著『岡山県中学校・高等学校英語教育史年表』を素材に」の発表が行われました。司会は河村和也氏 (東京電機大学) でした。以下に参加者の感想を掲載しますのでご参照ください (①は藤本氏, ②は山田氏及び拝田氏の発表への感想です)。

◇ ◇ ◇

◆2 つの発表とも私にとって興味深いものであった。藤本先生の研究は, どのような視点から教材を編纂するかの 1 つの視点を示されたものであったと思う。国家元首がどの程度扱われているか。「戦争と平和」をテーマとすれば他にどのような視点から教材研究が研究できるでしょうか? 宗教問題? 教科書で扱うべき国家元首に相当するものは他にどのようなものがあるのか考える機会となりました。山田先生の研究を拝見してその絶えざる努力に圧倒されました。私どもの研究室史を考えている時でもあり刺激となりました。 (三浦省五)

◆①高校教科書の題材分析を特に戦争・平和に焦点をあてて続けておられますが, 教科書に登場した国家元首級の人物という切り込みによって新しい視点で分析され, 彼らの発言に freedom, democracy, human rights, dream

等の人類普遍の希望が託されているとのまじめに納得し, また関心を覚えました。もちろん, そこには教科書編著者の思いも大きいとは思いますが。

(Dragon)

◆①藤本先生の長年の研究課題である「英語教科書の題材論」における平和題材に新しい 1 ページが刻まれましたね。国家元首級という phase により分析することで, 各国の平和意識もうかがえるのかと感じました。「検定教科書に登場する国家元首級の発言には人類普遍の希望が託されている」という言葉に共感を覚えるとともに深く感銘を受けました。今後の日本の改定教科書にも希望を持ち続けたいと感じます。また, フロアからのご発言で教科書編集に宗教や思想を取り入れることの困難も聞かせていただき勉強になりました。

(insulae flumen)

◆①いつもながら緻密なご研究で感銘を受けました。教科書の題材論研究は少ないので貴重です。検定教科書研究においては文部省の学習指導要領との関係は欠かせないと思いますので、(1)1950年代までの指導要領が平和と民主主義をリードしていた事実と教科書題材との関係、(2)1970年指導要領で題材規定を「英語圏の人々」から「広く世界の人々」へと拡張したと教科書題材(登場人物の国籍)との関係などを考案されると相関性が見えてくるかもしれないと思いました。(みかん舟)

◆①政治的指導者や国を象徴する人の発言を採用した時代背景やそれぞれの時期にどんな人物の発言が取り上げられていたかということがよく分かりました。教科書を作成する側からのお話もお聴きすることができ、非常に興味深かったです。(A. N.)

◆②山田先生の作成された年表を素材としてご発表は先生の長期にわたる教育経験とシンクロしてとても濃厚なものでした。時間の制限があったことですべてを語っていただけなかったのは残念でしたが、先生にお目にかかるたびに様々なエピソードをつまびらかにしていただく楽しみができました。作成を終えたご感想を'It is not the result but the process that counts.'という言葉で表現されたのは長期間に

わたる process で教育・研究に携わってこられた人にしか言えない重みのある言葉だと感じました。

また、拝田先生による討論も、用意周到で的確なものでした。今後の展開で岡山県を嚆矢として、全国 47 都道府県の年表がそろうことを期待するとおっしゃいました。この言葉に誘われてどこかの都道府県で戦後年表第 2 号が出ることを心待ちにしています。(insulae flumen)

◆②全国的にも、これほど詳細な英語教育史年表は岡山だけだと思います。たいへんな御苦勞がありがたかったです。感謝申し上げますと共に、他府県でもこれに続く労作が出ることを願っております。21 ページに及ぶレジュメも貴重な資料で、先生の語りも明快でしたので、とても学びの多い時間でした。(みかん舟)

◆②詳細な内容、また岡山県だけでなく日本全体の流れも把握することができる、素晴らしい本だと感じました。先生ご自身のお話をお聴きできる貴重な経験になりました。(A.N.)

◆②年表作成は歴史研究者の最終目標と言われますが、資料収集の前にご自身が良い意味での記録魔であることの結晶かと思います。本日はこの年表作成にまつわる裏話を含めて要点を伺い、大いに興味を覚えました。再読の際に指針としたいと思います。(Dragon)

<発表を終えて>

藤本 文昭(横浜翠陵中学・高等学校)

今例会の発表タイトルにある「国家元首」とは誰を指すのか。「国家の政治的指導者」ということで発表時には、フロアの皆様にご納得いただいたが、安易なタイトルをつけるものではないとまず第 1 の反省。英語教科書の題材は時代と共に変化しているが、その点について学習指導要領との関係を掘り下げずに論じたことは検定教科書を語る者として前提を踏まえていない、これ第 2 の反省。昨年 of 広島例会で江利川春雄氏のご著書の指定討論者として「戦後の教科書で皇族を題材として扱ったものはない」と断定的に発言したにも関わらず、それらしき題材を今例会で紹介せねばならなかったこと、己の不十分な調査に恥じ入るばかり。これ第 3 の反省。

こんな稚拙な発表にも関わらず、他教科との連携を意識した英語題材の扱い方という教科横断型授業に関する問題提起をいただき、また教科書執筆に関わった先生方からは「存命している人物」



を題材に取り上げることの難しさを教えていただいた。オバマ大統領のプラハ演説を題材にするのに賛否両論があったこと、中学・高校の教室で自分たちが使用している教科書作成の裏にそんな苦労があるとは。フロアからのお言葉は発表者に、この分野へのさらなる研究意欲を高めてくださった。お礼申し上げます。

### ＜発表を終えて＞

山田 昌宏 (日本英語教育史学会会員)

拙著は中学校と高等学校の英語教育に関する研究会、研修会、研究発表、研究論文、生徒の活動成果及びそれらに関わった方々、その他関係する国の施策等を時系列で年表形式にまとめたものであるが、ただ夢中で資料を集めて年代順に並べただけのものであり、また、資料も集めきれなかったこともあり、不十分なものとなっています。

発表では年表で取り上げた事項の中で、岡山県の中学・高校の英語教育で影響の大きかったと思われるものを数点取り上げてお話ししました。指定討論者の拝田先生からは好意的な評価をいただき、恐縮しております。また、今後の研究指針になる有益なご助言もあり、それらも勘案して、次には岡山県の中高英語教育に貢献したと思われる人物を中心にしたものをもとめてみたいと考えています。学会の先生方、大変お世話になりました。



### ＜発表を終えて＞

拝田 清 (四天王寺大学)

本書『岡山県中学校・高等学校英語教育史年表』(以下『年表』)は、戦後の岡山県の中等教育における英語教育の変遷が、中学校、高等学校、行政等それぞれの項ごとに年度ごとに一覧できる体裁となっている。さらに、各年度には「その他」の項があり、国レベルの政策や出来事が示され、この部分だけを取り上げてみても、そのまま戦後の日本の英語教育史がコンパクトな形で示されており、我々英語教育史研究に携わる者には非常にありがたい。

研究会、研修会、研究発表、研究論文の発表者名とテーマが示されているので、テーマだけを拾っていても、戦後の英語教育における重要トピックの変遷が俯瞰できる。発表者や講演者の氏名もある。たとえば、岡山県出身の小川芳男先生をはじめとして、錚々たるメンバーの名前が出てくる。1978 (昭 53) 年には、若林俊輔・森住衛両先生のお名前もある (お二人は 1983 (昭 58) 年にもそれぞれ講演と模擬授業をされている)。また、本学会副会長の田邊祐司先生も山陽短大時代に 3 回ほど登場されている。

著者の山田先生ご自身も、1980 (昭 55) 年以来、計 13 回にわたって研究発表、講演、模擬授業の助言者、研究論文の発表などで登場されている。多忙を極めていたであろう現場にいる頃から活発に岡山県の英語教育に貢献され、そして今、『年表』でさらに大きな貢献をされたと思う。

『年表』によって岡山県の英語教育から日本の英語教育を、そして世界の英語教育の動向を俯瞰することが可能となっている。まさに 'To see a world in a grain of sand.' (W. Blake) である。同じような体裁での年表を、残る全国 46 都道府県でもそれぞれ作成するというプロジェクトも面白いだろうし、必要ではないかと思われる。



## 》 事務局より

会員のみなさまには、会費の納入にご協力いただきありがとうございます。未納の方へのご案内が遅れご迷惑をおかけしております。順次お届けいたしますので、引き続きのご協力をお願い申し上げます。なお、ご不明の点がおありでしたら、お手数ですが事務局（会計担当）までお問い合わせくださいますようお願いいたします。

問い合わせ先：事務局（会計担当） 河村 和也

電子メール：[membership@hiset.jp](mailto:membership@hiset.jp) 電話：03-5284-5641

\*電話は研究室直通です。原則として月曜日から木曜日は在室しますが、不在時は留守番電話をご利用ください。折り返しご連絡申し上げます。

## 》 『日本英語教育史研究』 第 32 号投稿締切迫る

研究紀要『日本英語教育史研究』第 32 号への投稿締切が近づいてまいりました。締切は 10 月 31 日(月)〔必着〕ですので、投稿をご予定の方はご注意ください。

送付先：〒727-0023 広島県庄原市七塚町 562 県立広島大学 馬本 勉

## 》 論文投稿の前にご確認を

学会誌『日本英語教育史研究』に論文の投稿を予定されているみなさまにお願いいたします。会報 276 号掲載の「投稿規程」および「投稿論文標準書式」に基づいて原稿を準備されていることと思っております、特に以下の点にご留意ください。

◎完成ページで 20 ページ以内が原則です

すでにお知らせの通り、「標準書式」では文字の大きさ・1 ページの行数・1 行の文字数・使用フォント・句読点の打ち方なども詳しく定めてあります。今一度ご確認ください。

なお、最初のページは、(1)論文題目、(2)論文題目の英訳または和訳、(3)執筆者名とそのローマ字表記[例 ERIKAWA, Haruo]、(4)日本語または英語のキーワード 3 語、(5)100～150 語の英文アブストラクト、(6)本文の順となりますので、漏れのないようご注意ください。

◎コピーと受領確認用の葉書をお忘れなく

著者名が必要なのは正本 1 部のみです。副本には著者名が入らぬよう、プリントアウトもしくはコピーの際にご配慮ください。また、提出原稿にはページを付していただきます。手書きでもかまいませんので、お忘れなくお願いいたします。

◎インターネット上での公開が前提となります

現在、J-STAGE で公開されているのは第 23 号までに掲載された論考ですが、今後その範囲は拡大される可能性があります。インターネット上で論文が公開されることについては、投稿の段階でご承諾いただいていることとなりますので、くれぐれもご注意ください。

## 》 新入会員（敬称略）

◆ 小沢 茂（おざわ しげる）愛知県 愛知淑徳大学

## 第 260 回 研究例会のご案内

日 時： 2016 年 11 月 26 日 (土) 14:00～17:00 (会報等に掲載した日から変更されました。)  
場 所： 東京電機大学 (東京都足立区千住旭町 5 番)  
東京千住キャンパス 2 号館 10 階 21005 (21005 教室)

研究発表 「英語教育史研究におけるテキストマイニング：研究事例の紹介と今後の展望」  
青田 庄真 氏 (東京大学大学院教育学研究科・日本学術振興会特別研究員 DC)

【概要】 英語教育においても学習指導案や記述式アンケートの分析に用いられている、テキストデータの内容分析を定量的に行なう手法を、歴史研究にどのように適用できるのかについて議論する。本発表では、戦後日本の英語教育政策について国会会議録を用いて発表者が行なってきた研究事例などを紹介すると共に、こうした手法を用いて縦断的検討をする際、現存する各種電子資料を用いてどのような課題が考えられるのかについて議論する。

自著を語る (特別編) 「若林俊輔の英語教育論を再考する：

『英語は「教わったように教えるな』を素材に」

提案者：河村 和也 氏 (東京電機大学)・若有 保彦 氏 (秋田大学)

【概要】 若林俊輔先生が亡くなって間もなく 15 年になろうとしています。先生は英語教育に関して膨大な数の論考を遺されましたが、その多くが雑誌論文 (雑誌記事) であったため、現在では気軽に読むことができない状況になっていました。この 6 月に研究社より刊行された『英語は「教わったように教えるな』』は、先生に教えを受けた者が編者となり、先生の論考から独自の視点で 46 本を選び出し、解説と注釈を付して一冊にまとめたものです。

今回の「自著を語る」は「特別編」と題し、本書を取り上げていただきます。編者のうち本会の会員である二人が本書の編集・出版について手短かに報告したあと、ご参加のみなさんとともに若林先生の英語教育論について議論していきたいと思っています。構成は、およそ以下のようになっています。

### 1. 本書の編集・出版について

(1) 出版のきっかけ (2) 編集方針 (3) 編集・執筆過程で気づいたことや考えたこと

### 2. 若林先生の英語教育論について

(1) 学習者論および授業・指導技術 (2) 教材 (3) 英語教育政策

若林先生は本会の発足以来の会員で、お亡くなりになったことで退会されました。本会の例会にふさわしく、英語教育史の視点を大切にしながら、英語教育の現在と未来への示唆となるような議論ができたかと願っています。

参加費：無料

問合せ先：日本英語教育史学会 例会担当 (reikai@hiset.jp)

◆例会終了後に懇親会を行います。こちらにも奮ってご参加ください。

★会員外の方の研究例会へのご参加を大いに歓迎いたします。

## 【会場案内】

(東京電機大学 website より)

## 【交通案内】

JR 常磐線

東武スカイツリーライン

地下鉄日比谷線

地下鉄千代田線

「北千住駅」東口 (電大口)

下車徒歩 1 分



## 第 260 回研究例会にお越しのみなさまにお願い

11 月の研究例会は、会場校の都合によりこれまでと異なる 2 号館での開催となります。2 号館入口で係より V カード (入館証) をお受け取りになり、以下の順路で 10 階までお上りください。

(1) 2 号館の入口より入館する。

\* 入口は 1 か所のみです。1 階に入館ゲートはありません。

(2) エスカレーターで 2 階に上り、左手のゲートを通る。

\* V カードをセンサーに当ててください。

(3) エスカレーターを乗り継ぎ 10 階まで上がる。

\* エレベーターはご利用になれません。

1 号館よりお入りになると会場までご案内するのが難しくなりますので、必ず 2 号館入口にお越しください。みなさまのご協力をお願い申し上げます。

## )) この先の研究例会・全国大会

- ◆ 第 261 回研究例会 2017 年 1 月 7 日 (土) 東京都足立区で開催予定
  - ◆ 第 262 回研究例会 2017 年 3 月 18 日 (土) 大阪府大阪市で開催予定
  - ◆ 第 33 回全国大会 2017 年 5 月 20・21 日 (土・日) 福島県郡山市で開催予定
  - ◆ 第 263 回研究例会 2017 年 7 月 15 日 (土) 東京都足立区で開催予定
  - ◆ 第 264 回研究例会 2017 年 9 月 16 日 (土) 広島県広島市で開催予定
  - ◆ 第 265 回研究例会 2017 年 11 月 18 日 (土) 東京都足立区で開催予定
- 日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は、(1) 発表希望月、(2) タイトル、(3) 発表概要 (100~200 字程度)、(4) 使用予定機器、以上の 4 点を明記の上、発表希望月の前々月 10 日 (3 月発表希望であれば 1 月 10 日) までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

**EDITOR'S BOX** 広島カープが 25 年ぶりに優勝しました。ファンとしては本当に長い 25 年でした。(若)

© 日本英語教育史学会会報編集部 (秋田大学 若有研究室 [geppo@hiset.jp](mailto:geppo@hiset.jp))